ロビンフッドたちの青春

～青年期・成人期障害療育施設「もみじ・あざみ」での療育実践の発達的・臨床的意義～

田中真介[1]、張貞京[2]、川岸育子[3]、玉村公二彦[4]
([1]京都大学、[2]京都文教短期大学、[3]育つ人育てる人のための相談室、[4]京都女子大学)

キーワード：青年期・成人期・中高齢期の発達、知的障害、演劇療育、自己信頼性、社会的交流性

【企画の趣旨】

糸賀一雄（1914～1968）は、1946 年に滋賀県大津市に児童養護施設「近江学園」を設立し、戦災孤児や知的障害のある子どもたちを受けとめてきた。その後、18 歳で成人期に達する児童のために、1952 年に信楽寮、1953 年に入所更生施設あざみ寮、1969 年に入所授産施設もみじ寮を立ち上げた。もみじ寮とあざみ寮は、のちに「もみじ」「あざみ」と命名され、2024 年現在、もみじ 41 名（20～80 歳代、平均年齢 64 歳 8 か月）、あざみ 26 名（同 58 歳 6 か月）、計 67 名が仕事と生活をともに暮らしている。職業教育（織物、陶芸、調理、クリーニング、農園、園外就労など）に取り組み、また伝統的に演劇、音楽、絵画、スポーツ等の多彩な活動を取り入れた先駆的な生活療育を実践して、知的障害・発達障害を含む多様な心身障害を担う寮生たちの健康と発達を支えている。

筆者らは、寮の行事（文化祭、運動会、演劇公演）への支援的参加とともに、寮生と面談を行い、新版 K 式発達検査をもとに独自に考案した課題で寮生の発達の魅力と特徴をとらえてきた。このワークショップでは、療育実践の貴重な成果、また 2015 年度の演劇公演の前後に実施した面談の記録について話題提供を受け、青年期・成人期・中高齢期の発達を大切にした新たな生活支援と療育実践のあり方を考える。

【話題提供１】

張 貞京「もみじ・あざみの療育実践の発達的意義　～演劇公演での面談調査をもとに～」

もみじ･あざみでは、仲間とともに取り組む生活と仕事、そして演劇などの表現活動を通して、一人ひとりの発達を保障することを大切にしてきた。障害の種類や程度に違いがあっても、仲間と支えあって生き、働く大人としての日常を大切にし、様々な表現活動が日常を豊かにしている。

寮生たちが担う仕事の一つに織物づくりがある。織物工房で始められたホームスパンは、1台の織機を動かすために18人の力が必要となる。織物を制作する力の差を越え、この仕事が一人も欠けることのできない作業であることをみんなが認めあう。その姿勢は生活全体に広がり、身近にいる仲間と共感しあい、時には憧れ、互いの人柄や発達を認め受けとめあう日常を積み重ねてきた。

演劇活動は、大津のあざみ寮の時代に、クリスマス会での発表会で始まった。1969 年石部町への移転後、あざみ寮、男子寮、女子寮の 3 棟に分かれた各寮が 3 月のひな祭りの時期に劇を発表し、「ひなまつり劇」として本格的な演劇活動につながった。

1979 年あざみ寮 25 周年、もみじ寮 10 周年の創立記念の年に、全員で一つの劇をしようと取り組んだ演劇活動が「ロビンフッド寮生劇」と呼ばれる。以後、プロの劇団員など多様な関係者の参加と支援を得て稽古を重ね、公共のホールでの公演を続けてきた。演劇を通して、自分の思いを非日常の劇の中で表現する喜びを感じながら、自分や仲間の変化をより深くとらえている。こうした経験が自他の理解を深め、次の活動への見通しを持ち、将来の生き方を充実させていく意欲につながっている。

ロビンフッド劇の前後に実施した個別インタビューの結果を紹介し、仲間とともに取り組んできた寮生活での貴重な発達的変化を報告する。

【話題提供２】

川岸育子「主体的な暮らしの営みを支える療育実践」

生き物がもつ“子育て”という機能を“サービス”や“商品”として“外注”することが当たり前になり、“子育て”という機能がまとまりを失ってバラバラな断片になっている。そんな時代に、もみじ・あざみでは『ともに暮らしを営む』ことが大切にされてきた。

寮生たちには「知的な幼さ」と「コミュニケーションのとりにくさ」というハンディキャップがあり、一人ひとり異なる家庭的背景がある。そのため職員は寮生の体験世界をイメージしにくく、その行動の意味の理解は容易でない。その中で寮生ひとりひとりを“わかろう”と努力し、寮生が“主体的に暮らしを営むこと”を目指す取り組みを実践してきた。

暮らしとは、食べる、寝る、働く、遊ぶことなどの多彩な組合せによって成り立ち、人が世の中に順応しつつ生きていく営みでもある。怒り、悲しみ、喜び、願いを織りなす中で、きれいごとや理想だけでなく、時に互いに疲れて投げやりになることもありながら、寮生たちが暮らしをともにする日々は、単なる順応にとどまらず、自発的・能動的・主体的に自分の生き方を新たに開拓していく貴重な時間となってきた。

秋の『文化祭』、また春の『ひな祭り劇』や 5 年に一度の『ロビンフッドの冒険』の舞台は、寮生活のそうした営みの「発表の場」となる。文化祭での展示作品には日々の仕事と誇り、ロビンフッド劇からは、自分がこの世界に存在し自分の願いを素直に表現する喜びが伝わってくる。演劇という“晴れの場”は日々の営みと地続きでありながら“壮大なごっこ遊び”の舞台となり、“非現実的な現実”の世界の中に丁寧に配慮された枠が準備され、舞台は守られた特別な場となって“心の中にわだかまっている何かを安全に表現できる場”となる。これらすべてが『暮らしを営む』ことであり、「暮らし」は、職員と寮生の血の通った生々しい育ち合いの営みとなる。寮での暮らしを支えた療育実践の臨床的意義を考察する。

【指定討論と総合考察】

１）田中真介「演劇実践の発達的・臨床的意義　～自己信頼性と社会的交流性の発達を支えた実践～」

寮生活での多様な取り組み、また総合芸術としての演劇実践を通して、寮生たちが自己信頼性（自分の価値を感受し尊重する力）と社会的交流性（自分とまわりの世界とのつながりを作る力）をどのように啓培してきたかを検討し、青年期から中高齢期の新たな発達的・臨床的な援助の観点を示す。

２）玉村公二彦「もみじ・あざみの療育実践の意義と展望」

もみじ・あざみでは、寮生劇をはじめとして、これまで成人の人たちの憲法学習、講師を招いた各種の学び、絵画教室など多面的な療育実践を行ってきた。それらの実践は、専門家を交え、継続的に行うこと等を特徴としていた。施設外の専門家と寮生が交流することによってもたらされるものの意義、そして将来のよりよい療育のあり方を考えてみたい。

（たなかしんすけ、ちゃんちょんきょん、かわぎしいくこ、たまむらくにひこ）